

Title	書評：近森高明・ 右田裕規編著『夜更かしの社会史： 安眠と不眠の日本近現代』吉川弘文館、2024年
Sub Title	
Author	鳥越, 信吾(Torigoe, Shingo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.98- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

近森高明・右田裕規編著『夜更かしの社会史——安眠と不眠の日本近現代』

吉川弘文館、2024年

鳥越 信吾

1. 安眠と不眠——本書の意義

したがって時間の浪費は、あらゆる罪のなかで何よりもまず、そして原則的にもっとも重いものである。自分の召命を「確実にする」ためには、人生の時間は限りなく短く貴重である。社交や「無駄話」や贅沢ばかりでなく、健康に必要な——六時間から多くとも八時間の——分よりも長く睡眠をとることによる時間の損失は、道徳上絶対的に非難されるべきことである¹⁾。

(Weber 1920: 167=1941: 204)

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで、ピューリタニズムの代表的信徒であるリチャード・バクスターの考え方をウェーバーが説明している箇所である。バクスターは、ベンジャミン・フランクリンほどは徹底していないにせよ、「時は金なり」の精神を分け持っているとされる。注目すべきは、バクスターが無駄話や贅沢などに加えて、睡眠に関しても厳しい時間規律の考えをもっていることである。いわく、健康に必要な六時間から最大で八時間以上の睡眠は、絶対に避けられるべき時間の損失である。この箇所からわれわれは、資本主義の精神にはじめから内在していた「不眠」の規範を看取することができる。近代資本主義において人は眠らず懸命に働かなければならないのである。

ただしその一方で、「安眠」の規範もまた、この箇所から読み取られうる。人との付き合いさえも「道徳上絶対的に非難されるべき」時間の無駄として厳しく退けるバクスターが、健康に必要な六時間から八時間の睡眠にかんしてはむしろ容認しているからである。労働に邁進するためにはしっかりと寝なければならない——近代資本主義の精神とは、「安眠」をもまた人びとに要求するものであった。

生まれ出ようとしていた資本主義の精神のなかに、実は「安眠」と「不眠」という相互に矛盾する二つの規範がまさに眠っていたという事実、そしてその後、近代の発展とともに両者の規範が様々な社会領域で大きな存在感を発揮するようになるその実態——これらについて詳しく教えてくれるのが、本書『夜更かしの社会史』である。本書を貫くのは、まさしく近代における「安眠と不眠の並立状況」(p. 6) という見立てである。右田裕規が序章「安眠／不眠を欲望する社会」で指摘しているとおり、近代とは、安眠と不眠という相反する規範がしかし同時に諸個人に要求される時代である。すなわち、近代とは夜のスムーズな眠りを補助する製品が大量に登場し、「産業社会に適合的な身体

を保持すべく、人びとが主体的に自己の眠りを管理しはじめた」(p. 4) 安眠社会であったと同時に、「さまざまな業界で交替制での二四時間労働が推し進められ」(p. 4) たり渋沢栄一らのショート・スリーパーがロールモデル化するなど、不眠社会でもあった。

本書の意義のひとつは、安眠と不眠の規範が近代のなかで徐々に育まれやがて蔓延っていくさまをヴィヴィッドに描き出しているところにある。本書はこれによって、これまでの睡眠文化研究に支配的であった「近代化＝社会的不眠化の歴史」という理解に一石を投じる射程をもつ (p. 7)。のみならず、それぞれの論考のテーマの面白さと筆者たちの卓越した記述力によって、純粋な読み物としても良い本である。

2. 各章の概要

次に各章の概要を紹介しておこう。第一部「眠らない工場の出現——生産領域の不眠化」の第一章「規範化する睡眠とロマン化する不眠」(近森高明) では、安眠と不眠の並立状況が、「安眠の規範化」と「不眠のロマン化」というかたちで初期近代に成立したあと、その後徐々に不眠からロマン主義的色彩が失われていくさまが描かれる。同第二章「夜なべ」の近代史」(右田) では、近世までは主に農村の実践だった夜業が、照明技術の変化とともに都市へと流入してくるプロセスが論じられる。同第三章「夜業と興奮剤の二〇世紀」(右田) では、夜業のさいのヒロポンとコーヒーの摂取実践が論じられ、こうした興奮剤ブームが、実は人間と機械のアナロジーによって支えられていたことが明らかにされる。

第二部「眠らない街の出現——消費領域の不眠化」の第一章「夜の消費文化と商業照明」(右田) では、都市の夜間消費文化の発展を支えていたのは照明だったことが明らかにされる。すなわち、電灯が夜の街に社会的な明るさを持ち込み、かつ、ギラギラとした商業照明の過剰さが浪費を象徴することで、夜間消費は発展していったのである。この論考は、第一部第二章と響き合いながら、いわば「光の社会的意味」を論じるものとなっている。同第二章「盛り場と安眠妨害」(右田) では、夜間レジャー施設が安眠保全という観点から規制されていく歴史が論じられ、この規制を駆動していたのが、「騒音＝疫病」という疫学的発想だったことが示される。

第三部「安眠を支えるモノたち——睡眠の商品化」の第一章「寝床を電化する」(近森) では、電気あんかの盛衰史が、日本の住空間構成の変容との関連のもとに詳細に論じられる。これをとおして筆者は、一見「自然」なものと思われがちな寝床を、さまざまな要因の複合的かつ相互依存的なつながりへと開いていく視点を打ち立てる。同第二章「時間の再魔術化と呪術的なモノの蘇り」(竹内里欧) もまた寝床をテーマにする論考であるが、こちらは現代の親たちによる子の寝かしつけ実践を主題化するものである。親たちが「効率的に「非効率的で豊かな時間」を確保したい」(p. 163) と考え、そのために「魔法」などの言葉が踊る「呪術」的なモノを駆使していることが明らかにされる。

第四部「眠りの人口抑制という夢——睡眠の資源化」第一章「覚醒と睡眠のあいだを生きる」(西村大志) では、坂口安吾による睡眠剤と覚醒剤の服用実践が詳述される。これによって、一見放蕩無頼に見える坂口の生活態度を貫く独自の時間規律が析出される。同第二章「夢の勉強法としての睡眠学習」(井上義和) では、睡眠時間を有効利用しようとする「夢の勉強法」としての睡眠学習実践の盛衰が、日本とアメリカを舞台に鮮明に描写される。最後に終章「眠りのコントロールからマネジメ

ントへ」(近森)では、初期近代にあっては長く寝ることをよしとしていた睡眠文化が、後期近代にあっては睡眠の質を高める方針へと転換しているさまが明らかにされる。

3. 量から質へ? ——後期近代の時間経験の解明のための本書の示唆

最後に、評者の専門である時間論に引きつけて本書の意義を引き出したい。

終章の近森の論考が明らかにしているとおおり、睡眠は初期近代にあっては量を求めるものだったところが、後期近代にあっては質を求めるものへと転換した。この「量から質へ」という流れは、本書の議論をまた別の視点から整理しうる枠組みとなりうるように評者には思われる。たとえば近世から近代への移行に伴う夜更かしの常態化を集中的に論じた右田の諸論考や、西村の坂口安吾論、井上の睡眠学習器論など、いわば初期近代を中心的に論じた本書の論考はいずれも、二四時間という時間を合理的に余すことなく使い尽くそうとする制度や実践のあり方に光を当てていた。これに対して、後期近代に焦点を合わせた前述の近森の論考や竹内の寝かしつけ論が教えてくれるのは、二四時間のなかに使い尽くすことのできる余地がもはやなくなった現代における新たな実践のあり方、すなわち、質の追求である。短時間でも質的により豊かで深い経験ができれば、それは量の不足を補って余りあるはずだ——こうした発想は、おそらく眠りや寝かしつけだけにとどまるものではなく、むしろ、「社会的加速」(Rosa 2005=2022)が高度に進んだ後期近代の時間経験の通奏低音だと言えそうである。

そうだとすれば、この状況は、時間研究にとってひとつの挑戦である。これまでの人文社会科学の時間論の一つの型として、合理化的な近代の時計時間を、別様の質的な時間を持ち出して批判する論法があった。日本の社会学では真木悠介の『時間の比較社会学』がよく知られているが、これにとどまらず、時計時間による生きられる時間の疎外を何らかの質的時間を持ち出すことで批判するような論法は、「時間の社会学における仕事の典型的な例」(Jaworski 1991: 523)とは言わないまでも、それなりに散見される論筋であった。最近では、近代の加速がもたらす病理を疎外論から捉え、その打破の契機として「共鳴 (Resonanz)」を持ち出すハルトムート・ローザの仕事が、同様の方向性をとっているように見える (Rosa 2010; 2016)。しかしながら、こうした批判は、量的時間の支配力の強いところに、その蒙を啓くかのように質的時間を持ち出す場合にのみ成立しうるものであるように思われる。これに対して、人びとがすでに量的時間に伴う問題と限界を自覚し、質的時間の探究へと舵を切った実践を行なっているのが後期近代社会だとするならば、したがって、時間の社会学が懸命にその可能性を探究してきた質的時間がすでになんらかのかたちで実現しているのが今日の社会だとするならば、時間の社会学は、こうした現状に対していったい何を言いうるのだろうか。本書はこのような時間論的なインプリケーションも有している。

【注】

1) 岩波文庫版大塚訳 (該当箇所は p. 293) も部分的に参考にしながら一部訳を改めた。

【文献】

- Jaworski, Gary Dean, 1991, "Classicism and Romanticism in the Sociology of Time," *Sociological Inquiry*, 61 (4): 522-34.
- Rosa, Hartmut, 2005, *Beschleunigung. Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Suhrkamp. =2022, 出口剛司監訳『加速する社会』福村出版.
- , 2010, *Beschleunigung und Entfremdung. Entwurf einer Kritischen Theorie spätmoderner Zeitlichkeit*, Suhrkamp.
- , 2016, *Resonanz. Eine Soziologie der Weltbeziehung*, Suhrkamp.
- Weber, Max, [1905] 1920, "Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus," *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, J. C. B. Mohr. =1941, 梶山力訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣.

(とりごえ しんご 昭和女子大学人間社会学部)